日英博覧会と「人間動物園」*

山　路　勝　彦**

平成21年、NHKはスペシャル番組、「シリーズJAPANデビュー」を組み、その第一回として「アジアの“一等国”」を4月5日に放映した。日本の台湾統治を主題にし、老人たちとのインタビューを通して50年間の統治政策を検証する内容であった。この番組でNHKは、台湾統治に関わる象徴的な映像として2枚の写真を紹介した。一枚は、明治43（1910）年に開催された日英博覧会に参加した台湾先住民、パイワン族の集合写真であり、他の一枚は昭和期の写真で、旧制台北一中の生徒たちの記念写真である。これら写真に登場する人物、あるいはその関係者にインタビューすることで、日本の植民地政策の負の側面を語る内容であった。歴史認識とは解釈の問題であるから、それはそれでよい。しかしながら、その論理にはいささか妥当性を欠いていて、説得力が十分でない箇所があったことは指摘できる。

この番組でとくに力点がおかれていた場面は、日英博覧会に参加したパイワン族に関する一齣であった。日英博覧会は1910年にロンドン郊外、シェファーズ・ブッシュで開催された博覧会で、産業や文化を紹介することで日本は近代国家として成長した姿をイギリス国民に見せることに意義を持っていた。この博覧会では、産業や文化の展示のほかに、いくつかの余興も行なわれていて、その一環としてパイワン族が参加した。会場内に台湾山中で暮していたと同じ家屋が建設され、期間中、そこにパイワン族が住み込み、「展示」されたのである。このことから、パイワン族が見世物扱いにされたというNHKの説明は、一見すると間違っていない。表面的には光り輝く日英博覧会に見えるが、実はおぞましい見せ物の世界であったと教えてくれたことで、NHKの放送は意義があった。しかしながら、つぎのような台詞が続くと、NHKの日英博覧会の理解はきわめて疑わしいものになる[1)]。

> 当時、イギリスやフランスは、博覧会で植民地の人々を盛んに見せ物にしていました。人を展示する、人間動物園と呼ばれました。日本はそれを真似たのです。

「人間動物園」という概念は、日本では吉見俊哉、フランスではブランシャールが最近、言い出している。これについては、非常に重要な概念であるので、後で詳しく説明しよう。日英博覧会が「人間動物園」の舞台であったとする見解は、刺激的であったし、新しい概念を世に広めたということで、NHKに対する評価を惜しむべきではない。しかしながら、この文脈で問題になるのは、「日本はそれを真似たのです」という一句である。日本はみずからパイワン族を「人間動物園」の対象として意識的にロンドンに送り込んだのであろうか。この「人間動物園」を主催したのは、日本当局であったのであろうか。この文章は主語をすり替え、日本に「人間展示」の実行責任を負わせているが、その主張にはいくつもの問題点がはらまれている。明治・大正期に開かれた数々の国内の博覧会では、日本は「西欧を真似」し、植民地住民を連れてきて見世物としていて、まるで「人

*キーワード：日英博覧会、人間動物園、台湾原住民、人間展示
**関西学院大学社会学部教授

1）この引用文章はNHKが「夕刻の備忘録〈議連の質問に対するNHKの回答〉」と題してインターネットに配信したもの。Mhtml.file://J:¥日英博覧会¥夕刻の備忘録%20「議運の質問に対するNHKの回答」［テキスト化］、による。

間動物園」のような扱いをしていた。その典型は大正期の「拓殖博覧会」である。ところが、日本が西欧の博覧会に参加した時、すなわち日英博覧会ではイギリス人の前で日本人がアイヌ民族やパイワン族と同じように展示の対象、すなわち見世物になったのである。当時の日本がおかれていた国際状況をみると、このような「ねじれ現象」、あるいは「二重構造」があった。ところが、NHKの放送では、この複雑な様相をもつ日英博覧会の位置づけを不問にし、事実認識をなおざりにしたため問題点を残してしまった。

「人間動物園」で見世物になったパイワン族の語りは、そうとうに衝撃的な話題を日本中に撒き散らしたようである。「人間動物園」という概念を利用できる根拠として、パイワン族は同じく余興に参加していた日本人の職人・芸人とは違った扱いを受け、見せ物としての視線を一身に浴びていたから、とNHKは理由を説明している[2)]。

> 「日英博覧会事務局事務報告」によれば、会場内でパイワンの人びとが暮らした場所は「台湾土人村」と名付けられ、「蕃社に模した生蕃の住家を造り、生蕃此の所に生活し、時には相集りて舞踏したり」と記されています。相撲などほかの余興と異なる点は、パイワンの人びとを「土人村」で寝泊り、生活させ、その暮らしぶりを見せたことにあります。

パイワン族が「台湾土人村（正確な英語表現ではThe Formosa Hamlet）に寝泊りしていたことは確かで、会場では人々の見下げるような視線を浴びていたことは疑う余地はない。まさしく、「人間動物園」という概念が有効性を発揮する場面である。それならば、日本人職人、芸人たちはどうであろうか。総勢235人に達する職人・芸人は最初こそ会場近くに居住場所を確保していたが[3)]、会場外での生活に不便を感じ、その後、会場内で寝泊りをするようになった。そして、パイワン族ともども、イギリス人の好奇心の対象にされたのである。こうして、日英博覧会は複雑な様相を示すことになる。

このNHKの報道番組は、日本の台湾植民地統治について多くの話題を提供していて、日英博覧会の存在について一般の関心を高めたことに意義があった。「人間動物園」という学術概念を一般に広めたことで、その試みは斬新であった。ただし、事実認識が甘く、粗略に描いていて、内容には不満が多く残る。本稿は、これらのいきさつを念頭においたうえで、パイワン族、そして同じくこの博覧会に参加したアイヌ民族の現地での体験を再現させ、日英博覧会がはらんでいた問題点について記述する試みである。

1　「人間動物園」という概念

19世紀中葉から始まった万国博覧会は、西欧列強が作り上げた近代産業の成果を謳歌する帝国主義の祭典であったことは、今日ではよく知られている。とりわけ、1851年、ロンドンで開催された万国博覧会にはクリスタル・グラスのパビリオンが建造され、それに水晶宮という別名が与えられたほど、華麗をきわめた世界が出現した。近代が生み出した数々の工業製品は多くの人々の垂涎の的であった。

しかしながら、この時代の博覧会は明るく希望に満ちた世界だけを照らし出していたのではなかった。多くの植民地を抱える西欧列強が、万国博覧会で見せようとしていた展示には、植民地と深く関わる事柄が数多く含まれていた。1889年にパリで万国博覧会が開催された時、植民地の生活をできるだけ忠実に人々に見せるため、現地風の住居を建築し現地に似せた村落を再現し、そこに植民地住民を住まわせて生身の人間を展示するという出来事が起きた。この、いわば「原住民村落native village」の展示は、その後の欧米で開催された博覧会でも踏襲されていく（Maxwell, A. 1999 : 19）。

西欧社会が博覧会で植民地住民を展示する理由として、社会ダーウィニズム、およびそれとの関連で「人種差別」観念の存在を考えねばならない。皮膚の色に基づいて人間を分類する考えは、

2）この引用文章の出典は、注1に同じ。
3）この参加者の数字は、農商務省（1912：870-872）による。

ブルーメンバッハなどによってすでに18世紀から推進されていたが、19世紀のビクトリア朝時代には「科学的」見地から人間を分類し、植民地住民を劣った「未開人」と規定し、階層的体系のなかで最下層に位置づける思考が優勢になっていた。その秩序の体系で頂点に立つのはもちろん欧米列強であり、植民地住民はこうした階層秩序のもとで陳列されたのである（Maxwell, A. 1999 : 2）。

帝国主義の時代、ヨーロッパでは「エキゾティック」で「野蛮」を売り物にする興行が流行していた。例えば、19世紀初頭のロンドンやパリで、一人の南アフリカのコイコイ族女性が展示の見せ者として話題をさらった出来事があった。その女性は本名とは別に、イギリスでは「ホッテントット・ビーナス」と呼ばれ、張り出した臀部、大きな唇など、ヨーロッパ人とは異なった体型がことさら強調され、サーカスなどの見せ物として扱うため、ロンドンに連れて来られた。この女性に対して、あたかも奇妙な生き物であるかのように一般住民は好奇な眼差しを向け、学者もまた「科学的」見地からその身体性に関心を持った（Boëtsch, G. & P. Blanchard 2008 : 62–72）。死後、その遺体は解剖され、パリの人類学博物館に学術標本として展示された。永原によると、その解剖され、ホルマリンづけにされた部位は脳と性器であった（永原陽子 2000：62）。その「科学的」観点がどこにあったのか、もはや贅言を要すまでもないが、あえて言えば知性の程度と生殖力の観点で、そのコイサン族女性は科学者の関心を惹いたことになる。

社会ダーウィニズムの見地から植民地住民を階層化させ、博覧会で見せ物とした展示を「人間動物園」と名づけたのは吉見俊哉（1992：185）であった。植民地主義との関わりを議論し、内容的には同様な視点からフランス人類学史を再検討したのは、人類学者の竹沢尚一郎（2001）であった。しかし、この概念は日本では浸透せず、むしろフランスにおいて歴史学者たちが独自の歴史観のもとで取り上げたことのほうが、もたらした衝撃は大きかった。

フランス植民地史の研究者であるブランシャールらの精力的な出版活動はヨーロッパ世界で大きな反響を呼んだ。2008年に出版された『人間動物園』（*Human Zoos: Science and Spectacle in the Age of Colonial Empires*）の英語版を見ると、総勢35人の執筆人を擁し、ベルギー、ドイツ、イタリア、フランス、スペイン、スイス、イギリス、アメリカ、そして日本などからの事例が紹介されていて、19世紀以後の帝国主義国家で人種差別に根ざした「人間動物園」の発想がいかに蔓延していたのか知ることができる。展示の対象として植民地住民を連れてきて博覧会場に住まわせること、当時、これは「ネグロ村落 negro villages」と呼ばれていた。ただし、その対象は黒人だけではなかった。1874年、ハンブルグで開催された博覧会では、30頭のトナカイとともに北欧のサミ族の6家族が連れて来られ、「人類学動物学的博覧会 anthropozoological exhibitions」という名目のもとで大衆の好奇心の的にさらされた（Blanchard, P., Brancel. N., Boëtsh, G., Deroo Ē., & S. Lemaire 2008 : 7）。こうした見せ物は当時の欧米では繰り返し行われていた。

「人間動物園」という考えが成立する背景には、近代文明の頂点に立つと自認するヨーロッパ人の他者認識の問題が潜んでいる。それは「人種主義」の考えに立って人類を階層化させ、ヨーロッパ人以外を「劣等人種」、あるいは「未開人種」と位置づける思考方法である。こうした社会ダーウィン主義に基づいた「人種主義」のもとで人間を展示すること、この思考こそが「人間動物園」の発想にほかならない（Blanchard, P., Brancel. N., Boëtsh, G., Deroo Ē., & S. Lemaire 2008 : 19）。

この「人間動物園」は実際に日本の博覧会でも登場した。明治36年、大阪で開催された「第五回内国勧業博覧会」では植民地の住民らが多数、展示目的で呼び集められた。この展示を主導したのは東京帝国大学の坪井正五郎であり、坪井はヨーロッパでの風潮をまねて「人間展示」をしたのであった。しばしば議論の対象になる「学術人類館事件」が、それである（松田京子 2003；演劇〈人類館〉を上演させたい会 2005）。坪井はさらに大正元年に東京で開催された拓殖博覧会でも同じような「人間展示」を行なっている（山路勝彦 2008）。

これらの博覧会の詳しい説明は別の機会に述べるとして、ここでは、日英博覧会はそれらとは異

なり、日本人自身が展示の対象になったことを指摘しておきたい。そして、この博覧会にパイワン族およびアイヌ民族も参加し、展示の対象になっている。ところが興味深いことに、異国の地において展示されるという状況下でも、パイワンとアイヌは異文化に関心を持ち、他者理解に努めていたのであった。このように、博覧会場で「未開人」を見る西欧人の眼差しと、「文明人」を見るパイワン族とアイヌ民族の眼差しが奇妙に交錯していたところに日英博覧会の特徴があった。本稿では、この日英博覧会の経過を見ていくことによって、遠方からロンドンに連れて来られた人たちの、そのたくましい心性を明らかにしようと思う。

2　日英博覧会の概要

1）博覧会の会場

19世紀中葉、ヨーロッパで興隆をきわめた万国博覧会は、近代文明の頂点をきわめたという自意識がそこかしこで花開いていて、華やかな催しであった。こうした博覧会に日本も大いなる関心を示し、すでに江戸時代、徳川幕府はパリの万国博覧会に参加している。その後、明治政府は文明開化の旗印のもと、国内で何度も博覧会を開催し、あでやかな時代の流行を演出していた。初期には物産会の規模を超えられず、名称も共進会を名乗っていたが、やがて国力の伸張とともに大規模な勧業博覧会を打って出るようになった。明治36（1903）年に大阪で開催された第五回内国勧業博覧会は、規模からしても万国博覧会に匹敵するほどの盛大な催しであった。

それから7年後、日本はイギリスと組んでロンドンで日英博覧会を挙行する。それまで、日本は海外の博覧会に出品を出すことはあっても、主催者として参加していたわけではなかった。日英博覧会（Japan-British　Exhibition）は、主催者こそイギリスの博覧会会社であったにしても、日本政府が開催に深く関わり、しかも日本の産業、日本の文化、ひいては日本人自体をイギリス人の前に展示するということで、画期的な催しであった。

日英博覧会は明治43（1910）年5月14日から10月31日まで、ロンドンの西郊、シェファーズ・ブッシュで開催された。この博覧会の特徴は万国博覧会とは異なって、二国間で行われたという点にある。このため、特産品を陳列して日英両国の産業を紹介するだけでなく、両国の文化や国情を相互に認知しあうことに主要目的がおかれていた。したがって、産業上の出品以外に、文化や風俗習慣を展示することに大きな意義があった。

開催に至るまでの外交上の経過は、すでに河村一夫（1981a、1981b、1982）、国雄行（1996）、Hotta-Lister, A.（1999）の研究によって明らかにされている。外務省を中心とした日本政府の動向、それに対するイギリス側の反応、これらの記録は「英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件」などの外交文書に残されている。今までの研究を通して分ってきたことは、日英博覧会開催に対してイギリス政府が消極的なのに対して、日本政府がたいへんに積極的であったということである。イギリス政府はいっさい資金援助をしなかったし、英国王の来臨はあったものの博覧会開催に直接関与しなかった（国雄行 1996：68, 78）。これに対して、日清、日露の戦役で勝利し、日英同盟の締結を果たし、帝国日本が国力を高めてきた現状をイギリスに向けて伝えようとした日本政府の意気込みが、そこには感じられる。日英博覧会の開催は、日本側としてみれば、大国としての大英帝国と肩を並べたという強いメッセージを世界に向けて発信する絶好の機会という認識のもとで進められたのであった。

このように、日本政府とイギリス政府との間には博覧会の実質をめぐってかなりの認識上の差異があった。実際に、国雄行によれば、イギリス展示のみのパビリオンは8館あったが、イギリス側の出品は貧弱であり、実質的には博覧会の中心は日本の出品物であったという。この博覧会が確かに多くの人々を招き寄せたにしても、それは「極東の小国日本の展覧会ということで珍しく、人も集まった」（国雄行 1996：74）結果にほかならない。この日英博覧会が成功したのは、数々の余興を用意していたからで、それを見るために多くのイギリス人が会場に足を運んでいて、その限りで盛大であったと言うことができる。

この開催経過を見ていくと、興味深い人物、イムレ・キラルフィー（Kiralfy, Imre）なる人物が

浮かんでくる。日英博覧会開催の２年前、明治41年にはロンドンで英仏博覧会が開催されている。事務局長として、その博覧会を成功に導いた興行師がキラルフィーであった。その時に使用した博覧会場の設備を再利用することで、キラルフィーが日本政府に開催を打診してきたのが、事の発端であった。日本政府は、日英両国の和親と通商貿易の発達に貢献すると考え、開催に同意し、180万円の予算を計上した。後に、さらに28万円の追加予算を組み、本格的に組織化へと動く。日本側は事務局総裁に大浦兼武農商務大臣があたり、事務官長に和田彦次郎、事務官としてイギリス大使館の一等書記官であった陸奥広吉が担当した。英国側の主催者はシェファーズ・ブッシュ博覧会社があたり、イムレ・キラルフィーが実質上の責任者になった。博覧会運営が民間の一興行師の掌中に委ねられていた事実は、後で見るように、その性格を決定づけてしまった。

キラルフィーはユダヤ系のイギリス人で、1880年頃から博覧会の企画を数多く手がけてきた、いわば専門の興行師であった。博覧会をビジネスとして手がけるだけの企画力をもっていて、多くの成功を収めた人物である。なかでも、その派手な演出は1899年の大英博覧会に見ることができる。この博覧会で最大の呼物は南アフリカのカフィール族村落を再現させ、「野蛮な南アフリカ Savage South Africa」と題する展示を行い、ズールー、バスト、マタベレ、スワジなど南アフリカの諸民族174人を連れてきて、その日常生活を見せたことにある（Mackenzie, J. 2008 : 261–262）。それ以後、1907年にはこのシェファーズ・ブッシュに博覧会の専門会場を建設し、ここで1908年に英仏博覧会を実施し、1909年には国際帝国博覧会、1910年に日英博覧会、1911年には戴冠記念博覧会、1912年にはラテン・英国博覧会、1914年にはアングロ・アメリカ博覧会を開催した。

こうした経歴が語るように、キラルフィーは組織力と商才に長けていて、博覧会を金儲けのために利用した人物であった（堀田綾子・リスター 2002：225、237；Hotta-Lister, A. 1999）。このたびの日英博覧会も、博覧会を何度も手がけた幅広い経験をもとにキラルフィーは日本政府を説得し、開催したのであった。これに対して、日英親善という大義名分をもとに、日本政府は小村寿太郎（駐英大使、後に外務大臣）を中心に準備を進めていく[4)]。

この会場でどのような展示があったのかは、陳列館の名称をみれば推測がつくに違いない。その名称を列挙してみたい（農商務省 1912a：97–98）。日本語表記は農商務省の正式表記であり、右側は正式の英語表記である（図１参照）。

１、日本工業館　Japanese Industrial Palace
２、日本園芸館　Japanese Horticultural Hall
３、日本景色館　Japanese Scenic Hall
４、日本歴史館　Japanese Historical Palace
５、日本織物館　Japanese Textile Palace
６、日本富源館　Japanese Palace of Natural Resources
７、東洋館　Palace of the Orient
８、日本政府各省出品館　Japanese Government Departments
９、日本美術館　Palace of Japanese & British Fine Arts
10、日本婦人製作品、教育、山林、美術工芸館　Japanese Women's Work, Forestry, Education, Arts and Crafts

さらに、広大な敷地を占有して、次のような庭園が設定された。

11、日本平和園　Garden of Peace
12、日本浮島園　Garden of the Floating Isle

そして、休憩所として、日本茶と台湾烏龍茶の供給場所が確保されていた。

13、台湾喫茶店
14、日本喫茶店

このほかに、各種の余興施設が設けられていたが、それらは次章で詳述したい。さて、これらの陳列館を一瞥すると、日本の産業の伝統と近代を見せること、同時に歴史や文化を各方面から陳列

4）この経緯は国雄行（1996）が詳細に論じている。この経緯を語る資料は外務省（〈外交資料館〉1909a）を参照。

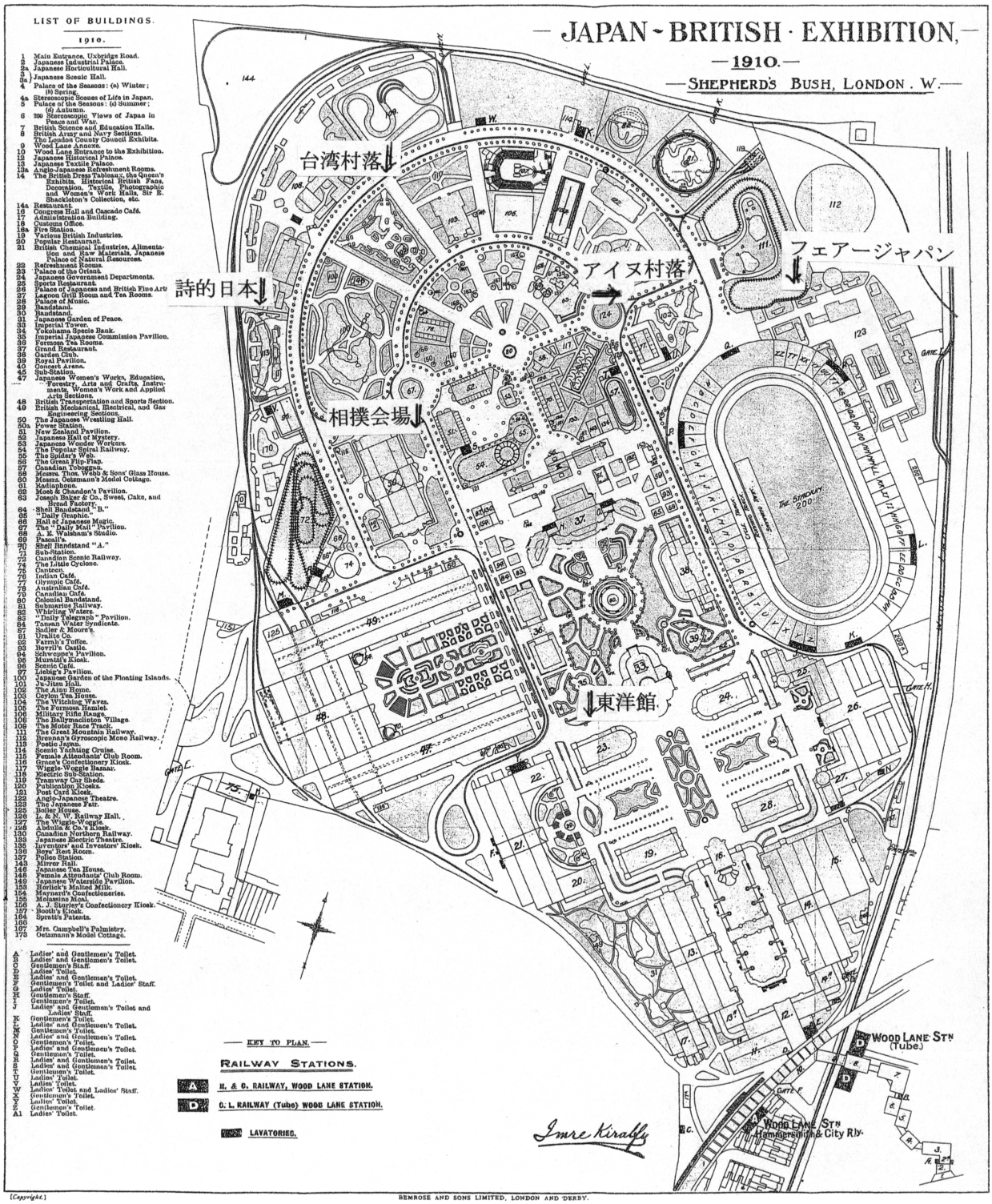

図１　日英博覧会場の概略図

便宜のため、「台湾村落」「アイヌ村落」「フェアージャパン」「詩的日本」「相撲会場」「東洋館」の場所を書き入れている。
出典：Commission of the Japan British Exhibition（Shepherd's Bush）1910?：折込み図。

図２　東洋館の内部

（a）広東政府展示　（b）台湾樟脳展示　（c）満鉄展示　（d）朝鮮展示
出典：Commission of the Japan British Exhibition 1911、折込み写真。

すること、これらの点に主眼がおかれていたのを知ることができる。もちろん、日本富源館では鉱物、蚕糸、農産物、漁業品など、日本織物館では織物・糸類を中心に、雑貨袋物、傘、皮類、紙類、家具、漆器、装飾品、印刷物など、日本の名産が展示されていた。機械類を展示する日本工業館では、さすがにイギリスに勝てるほどの巨大なものはなかったとはいえ、伝統と近代を見せる試みは随所で展開されていた。

日本歴史館には人気を博した展示があった。パノラマと風俗人形を配置することで、飛鳥、奈良、平安時代から明治時代に及ぶまで、各時代の風俗習慣が一望できるように工夫されていた。美術館では、近代美術のほか、浮世絵、彫刻、七宝も混じえ、「北野天神絵巻」などの国宝級作品も展示され、精彩を放っていた。さらに言えば、日英博の呼物の一つには日本庭園があった。日本庭園は「平和園」、「浮島園」の二つ、総面積はおよそ6000坪の広さであった。こうしてみると、日本の文化を紹介するという意味では、まさに「倫敦の市中に一個の小日本」が出現したことになる[5)]。

5）無署名〈雑誌『太陽』記者〉1910：10。

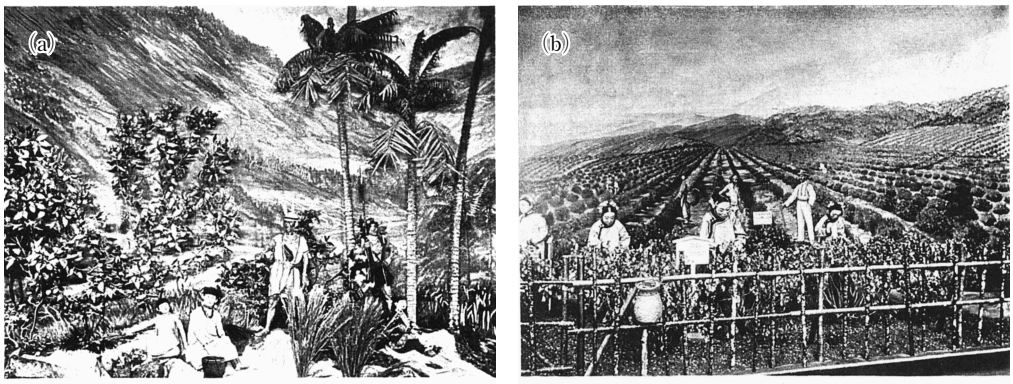

図３　東洋館の台湾展示の一齣

（a）山岳地帯を背景としたパイワン族　　（b）農村の茶摘光景
出典：Commission of the Japan British Exhibition 1911、折込み写真。

２）植民地の展示

日本の文化、歴史、産業などの展示以外に、日本当局が努力を傾注した事柄は、イギリスと同じく日本もまた植民地を持っていることを展示することで、「一等国」であることを証明するパビリオンの設営であった。日清戦争後、日本は台湾を領有していたし、日露戦争後は中国の遼東半島を支配下におき、また朝鮮には統監府をおいて朝鮮支配の機会をうかがっていた。このようにして、帝国の支配権を示すことで国力の近代化を見せつけること、これが日英博覧会の一つの目的であった。

会場の23号館は「東洋館 the Palace of the Orient」と名づけられ、この建物は、台湾、満鉄（南満州鉄道会社）、韓国総監府、広東政府からの出品によって構成されていた。満鉄は大連の港湾施設、鉱山や電気関係の事業の解説、韓国総監府は農産物や鉱産物の展示が主であり、日本統治の成果を謳う内容であった（Commission of Japan-British Exhibition 1911 : 283-292）。外見からみれば、こうした地域と日本を表象する展示とは相容れない（図２）。満州部の奥正面には漢族風の楼門が建てられていて、日本情緒とは違う「日本」が控えていた（大谷繞石 1910：20）。その舞台は、植民地帝国の偉容を宣伝する光景であった。

博覧会会場には、台湾に関わる施設は３ヵ所ある。一つはウーロン茶店、一つは本格的な展示場であって、この「東洋館」と名づけられたパビリオン、そして残りは先住民に関わる施設、「台湾村（落）The Formosa Hamlet」である。「東洋館」は朝鮮などと共有の空間を構成しているとはいえ、このうち台湾の展示は全体の３分の２程度を占め、植民地のなかでも台湾の比重の重さを感じさせている。出品の責任者は台湾総督府であって、その展示内容から出品した目的は容易に推察できる。

台湾展示の入り口の左右には二種類の人形がおかれている。右は山岳を背景にし、以前の風俗を身にまとった先住民の人形であり、左は台湾農村を舞台に茶葉を摘んでいる女の人形である（大谷繞石 1910：20、農商務省 1912b：551、さらに図３も参照）。内部に入ると、台湾の農林産物が眼に飛び込んでくる。ござ、帽子、籠、砂糖、パイナップルや熱帯の農商業産品、そして多種の茶が展示され、織物、化学製品なども並べられている。こうした展示を引き立たせるために、写真、図表などもふんだんに用いられていた。

総督府はこうした展示のなかでも、水道施設や港湾設備の改良、病院や医学校の確立、道路や水路の開鑿、鉄道の建設など、インフラ設備が植民地体制のなかで充実してきたことを示すことに力点をおいていた。総督府は、日本による台湾植民地統治の正当性をイギリスに向けて発信することをもくろんでいたのである。実際に、英語版の公式案内書には、水田の作付面積の増大、灌漑施設の充実など、農業の発達状況を数値で紹介してい

る記事を見ることができる（Commission of the Japan-British Exhibition 1911 : 286）。

3　日英博覧会のパイワン族とアイヌ民族

1）余興の数々

農商務省の公式報告書、『日英博覧会事務局事務報告』（上、下）は、会場内で多くの余興が行なわれていたことを報告している。これらの余興は博覧会場をおおいに賑わせていた。農商務省の報告書（農商務省 1912：867）に記載された、それらの余興を最初に取り上げてみたい。

1、会場内ニ日本家屋数軒ヲ建築シ、其ノ内ニ於テ日本物品ノ製作、実演ヲ為スコト。
2、「パノラマ」的ナル我田園ノ模型。
3、アイヌ村落。
4、台湾蕃人の生活状態。
5、本邦演劇。
6、独楽、曲芸、手品、山雀芸、水芸等。
7、活動写真。
8、要馬術。

これらの余興でイギリス人の関心をもっとも惹きつけたのは、「アイヌ村落」と「台湾蕃人の生活状態」とに関する事柄であった。北海道のアイヌ民族と台湾のパイワン族は、それぞれ約900坪と約1300坪の敷地をあてがわれ、会場内に自分たちの住家を作り、住み込みながらこの博覧会に参加していた[6]。以下、最初に公式記録を紹介してみたい。なお、正確さを期して、かっこ内には公式の英語表記を併記しておく（農商務省 1912：873）。

「アイヌ村落（The Ainu Home）」
「アイヌ」部落ヨリ齎シ来リタル数個ノ茅屋ヲ以テ部落ヲ構へ，「アイヌ」人之ニ分居シテ、其ノ日常ノ生活ヲ営ムカ如ク設備シ（以下略）

「台湾村落（The Formosa Hamlet）」
蕃社ニ模シテ生蕃ノ住家ヲ造リ、蕃社ノ状況ニ擬シ、生蕃此ノ処ニ生活シ、時ニ相集リテ舞踏シタリ。

これらの文言からして、アイヌ民族とパイワン族は、自分たちの「日常の生活」を見せるためにロンドンに来たことになる。いったい、そこでアイヌ民族とパイワン族はどのような生活を送っていたのであろうか。

2）パイワン族の参加

パイワン族は台湾の南部の山岳地帯に住み、言語学的にはオーストロネシア（南島）語族に属し、当時は焼畑耕作で粟や陸稲を栽培し、男たちなら銃器や罠賭けで狩猟に勤しんでいた人たちであった。そのなかで、南台湾の屏東県の牡丹郷に住む人たちが日英博覧会には参加していた。

通訳兼引率者の警察官とともに、明治43年２月21日に門司港を出発した台湾のパイワン族は総勢24名であった。日英博覧会に参加した目的は、イギリス余興部と台湾総督府の交わした契約書にはっきりとうかがうことができる。そこには、「公衆ノ面前デ生活状態ヲ見セルコト」という一項が書かれている[7]。この契約書で、甲とは台湾総督府民生長官の大嶋久満次であり、乙とはイギリスの興行担当シンジケートであると知ったうえで、次に引用してみたい（台湾総督府警務局 1921：149–151）。

甲ハ生蕃人ヲシテ日英博覧会会場ニ在テ乙ノ指定スル建物又ハ場所ニ生蕃人ノ生活状態ヲ作ラシメ公衆ニ示スコトヲ約ス。
但シ、舞踊及各種行列ノ催シアル場合ハ其ノ伍列ニ参加スルコトハ生蕃人ノ任意トス。

実際に、日英博覧会では会場内にパイワン族の伝統的家屋が建てられ、パイワン族はそこに住み

6）通常の日常会話では、民族呼称としてアイヌは「アイヌ民族」と言い、アイヌ人、アイヌ族とは言わない。パイワンに関しては「パイワン族」というのが普通であり、日本人に対しては日本民族と言うより、「日本人」と呼称するのが一般的である。ここで、「アイヌ民族」、「パイワン族」、「日本人」と表記するのは、こうした慣行に従っている。
7）末尾記載の「資料１　日英博覧会で交わされた契約書」参照。

こんでいた。一般のイギリス人大衆に日々繰り返される日常生活の起居動作を見せること、こうした観察対象に据えることがその目的であった。時として舞踊やその他の行事も行なわれていたこともうかがえる。生身のパイワン族を「展示」することは、活字や写真の展示に比べて、イギリス人の異国趣味をかきたてるのにいっそうの効果があった。こうした展示は19世紀の西欧の万国博覧会で繰り返し行なわれてきたことであり、手練手管に長じたキラルフィーの得意とする分野であり、まさに「人間動物園」と呼ぶにふさわしい。しかしながら、一見すると「人間動物園」に入れられたパイワン族に見えるが、本人たちは「檻の中の動物」という認識を持ち、屈辱に満ちた思いでロンドンでの見世物になっていたのであろうか。このあたりの事情は、さらに掘り下げてみる必要がある。

いったい、ロンドンにパイワン族を呼ぶ計画は誰が最初に考案したのであろうか。そもそも、ロンドンを訪れたパイワン族は、台湾南部屏東県牡丹郷の高士仏（クスクス）村を中心とした住民である。なぜこの村落の住民が選ばれたのか、その理由を明らかにする資料はない。ただ言えることは、明治４年に沖縄の宮古島民が那覇に向う途中で難破し、辿りついた南台湾でクスクス村の住民らによって虐殺され、これを契機として明治７年に日本政府による台湾出兵が行なわれたという歴史的事件、「牡丹社事件」が浮かぶだけである（山路勝彦 2008）[8]。

パイワン族の参加理由は不明であるにしても、確かに言えることがある。それは、日本政府、もしくは台湾総督府が台湾先住民を日英博覧会に送り出す計画を当初から抱いていたわけではなかった、と言うことである。むしろ、イギリス側からの要請で台湾先住民の参加をしぶしぶ認めたということの方が事実に近い。それを確認する資料は残されている。大嶋久満次・総督府民生長官が博覧会事務局の日本側責任者・陸奥広吉に当てた書状が公式記録として残されていて、それによると、イギリスの博覧会会社シンジケートの余興部から日本の博覧会事務局に「台湾生蕃人」の出場を要請してきたことが記されている（台湾総督府警務局 1921：151）。この要請が台湾に伝えられると、その要求を受け入れるかで総督府側はたいへん迷ったようである。明治43年といえば、台湾北部の山岳地帯では各地で抗日武装闘争が繰り広げられ、そこに居住するタイヤル族を屈服させるための平定作戦が進行中であった。その前年には、時の総督、佐久間左馬太による「理蕃五ヵ年計画」が実行に移され、北部山岳地帯では多大な犠牲を伴った激闘が展開中であった。こうした状況下でイギリスでの博覧会に参加させる余裕など、とうてい総督府は持てなかったからである。

結果として、このイギリス側の要求を受け入れたけれども、総督府は、パイワン族をロンドンに送るにあたって不平不満が生じないよう細心の注意を関係者に促し、保護と安全を依頼していた。もし、不満が生じ事態が紛糾すれば、日本に反抗する勢力が台湾全土に拡大する恐れがあったし、そうなると台湾統治のうえで大きな支障をきたすと考えたからである。ロンドンにいる日本政府関係者に送った書簡には、保護を訴える切実な内容の文面が記載されている。しばしば引用している『理蕃誌稿』には陸奥広吉に宛てた民生長官の依頼書が公開されていて、この緊迫した事情を裏付けている（台湾総督府警務局 1921：151、ただし、原文のカタカナはひらがなに変えている）。

> ……ご承知の通、生蕃人は総て総督府に於て特別保護監督を加え居るものにして、現に討伐中のものも有之傍、万一、今回渡英者中の彼等をして不備不満を起さしむる事態相生し候ては、今後、彼等一般に対する施政上に不尠、不便相感候次第にて、甚気遣罷在候。……生蕃人の保護に関しては貴官の御指導を蒙る様、出張員へ申達置候……

もしパイワン族が不平不満を抱けば、その影響

8）明治７年の牡丹社事件を踏まえて、台湾領有後この村の住民は徹底的に日本当局によって制御されたと思われる。同時に村人の日本への同化が進み、推測を逞しくさせると、こうした背景のもとで日本の警察は他の民族を押しのけてクスクス村のパイワン族に白羽の矢を立てたし、パイワン族も牡丹社事件の汚名を雪ぐ覚悟で積極的に参加したと考えられる。ただし、これは推測にすぎず、将来の解明が待たれる。

は計り知れず、気遣いを怠るなという主旨である。そして、シェファーズ・ブッシュ博覧会社に対してはロンドンの日本大使館に５万ポンドを供託金として納付させ、安全の保証を求めていた（台湾総督府警務局 1921：151-152）。このような細心の注意を払ったうえで、総督府は破格な待遇でパイワン族を送り出す。もちろん旅費、宿泊費はシェファーズ・ブッシュ博覧会会社が負担し、「生蕃人ノ為ニ必要已ムヲ得サルモノト認メ」た場合、その博覧会社は「酒、煙草等給与上ノ要求ハ之ニ応」じることが取り決められていた。さらに、出発して帰国するまでの毎日、「日本貨幣金一円ノ日当」を支給することが決められていた。この日当は驚くほど高額である。例えば、明治33年の小学校教員の初任給は10～13円であり、大正７年でも12～20円であった（週刊朝日編 1981：19）。したがって、このパイワン族は小学校の教員の倍以上の日当を稼いでいたことになる。『理蕃誌稿』（第三篇上）には、このような記述もある。すなわち、「滞英中得ル所ノ余費ヲ積ムコト、少キモ二百円ヲ下ラス。多キハ五百円ニ上リ」（台湾総督府警務局 1921：149）と。これは決して誇張した数字ではなく、パイワン族はこうした好待遇に満足していたようである。たとえ「人間動物園」と揶揄されようとしても、博覧会場には「銭のなる木」が植えてあったかのようである。

２）威風をただすパイワン族

パイワン族一行24名（男21名、女３名）は、２人の引率兼通訳の警察官とともに、明治43年２月６日、台湾の基隆港を出発し、４月15日にロンドンに到着した。日英博覧会の開催期間中、パイワン族は会場内の一施設、「台湾村（落）The Formosa　Hamlet」に居住していた。藁葺きの家で、故郷のパイワンの家を模して12戸の家屋群が配置されていて、そのうち２戸はパイワン族自身で建築した建物であった。室内には「銃器、首嚢、手槍、山刀、盟約の杯」など台湾で居住していたときの日常用具が収められていた（田中湄人 1910：36）。

この一行には台湾日日新報者の記者が同行していて、折を見てロンドンでの出来事を記事として発信している（図４）。その記事を取り上げ、パイワン族の様子を見ておきたい。

出立

初めての洋行のため、パイワン族の面々は緊張

図４　日英博覧会のパイワン族

日英博覧会には『台湾日日新報』の記者が同行し、日々の動向を写真とともに記事にしていた。この写真はロンドンでの記念撮影の場面。

出典：『台湾日日新報』明治43年９月21日。

し、薫り高き文化の都を目指し、期待を込めて旅行準備に勤しんでいた様子は、『台湾日日新報』明治43年２月23日の記事に見ることができる。「洋行蕃の武者振」と題した記事からは、服を新調し、礼装を整えるパイワン族の、ロンドンでの生活に夢を膨らませる姿が浮かんでくる。筒袖仕立の礼装と、無袖の陣羽織のような衣服を新調したばかりでなく、西洋婦人の前に出ても不都合がないようにと、蹲る時に股を顕わにさせないために袴も用意していて、身だしなみには配慮を見せていた。女の場合、台湾客家女性の服装に似せた衣服を着用するなど、気配りを見せていた。さらに、男女とも首飾り、胸飾りなど儀式用の装飾品を身につけ、凛々しき姿を浮き立たせる努力を惜しまなかった。男は銃や山刀も持参し、男らしさの表出に余念がなかった。

船上でのこと

船上での旅はけっして楽ではなかったようである。なかにはマラリアが発症した人もいたが、元気に回復している。門司から乗船した時、アイヌ民族も同道したが、両者でどのような会話がなされたのかは分らない。ただ、インド洋を航行中、同船したインド人が箸や匙を使わずに手づかみで食事しているのを見て、驚き、軽蔑していたことが報告されている[9]。パイワン族にとって、初めてと言ってもよい異文化体験であった。

ロンドン到着

船がイギリスの港に到着した時、パイワン族とアイヌ民族はそれぞれ別々の流儀で歓迎を受けたことが新聞記事から知ることができる。到着後、アイヌは汽車で、パイワンは馬車で、それぞれロンドンに向う。「和服を着け、日本語を語って温柔」しそうなアイヌに向けたイギリス人の眼差しは、異国趣味を満足させる風情のものでしかなかった。「アイヌは停車場に着くと、居合わせた多くの英国婦人等は発車の時間の迫ったのも忘れて一行を取り囲んで見守って居た」というから[10]、珍奇な生き物を物珍しそうに眺める視線が幾重にも取り囲み、重々しい空間が展開していたことになる。

これに対して、パイワンに向けた視線はやや異なっていた。パイワン族の威勢のいい態度はロンドン子を圧倒していた。何かにつけ行儀は粗野で、持参した刀や槍を振り回す態度は、そうとうに係員を当惑させたようである[11]。

> 或る新聞社員が写真に撮ったと云っては刀を抜き、食事が遅い、料理が口に合わぬと云っては槍を持ち出すと云う風で、係員が敬遠主義でハイハイと云って居るので、益々得意になり、王様気取りで空威張りして居る…。

会場内のパイワン族

パイワン族はそうとうな期間、同じ会場内の施設で生活していて、時には苦しく、時には楽しい様子が『台湾日日新報』の記事からうかがえる。山野で狩猟に興じていたパイワンの男たちにとって、会場内での生活はたいへん退屈であったようである。早く帰りたいと言い出す男も出て、監督官はなだめるのに一苦労した場面もあった。その反面、ロンドンでの生活を楽しむ人たちもいた。

『台湾日日新報』明治43年９月29日の記事には「日英博の生蕃館（上）」と題された文章が掲載されていて、それを通してみると、パイワン族の一日の生活行動を追うことができる。鳥瞰図を描いてみよう（図５）。会場内には、「台湾生蕃監督所」を中心にして12戸のパイワン風の建物が立ち並んだ一区画、「台湾村（落）」があった。その建物に二人ずつ寝泊りし、朝６時起床、８時に朝飯、12時半に午飯、そして午後７時に夜食というのが日常の営みであった。主食は粟と米と薩摩芋であるが、これに副食として肉が加わる[12]。酒類はウイスキーを夜間寝しなにやるといい、酒量は、適宜だが、土曜と日曜には多く与えるというから、当時の生活水準からしてさほど貧弱な生活ではなかったようである。新聞報道によれば、午

9）田原生「日英博の生蕃館（上）」『台湾日日新報』明治43年９月29日。
10）無署名「日英博の生蕃とアイヌ」『台湾日日新報』明治43年５月26日。
11）無署名「日英博の生蕃とアイヌ」『台湾日日新報』明治43年５月26日。
12）この部分は、無署名「洋行戻の蕃人〈１〉」『台湾日日新報』明治44年１月８日、による。

前11時から午後10時20分まで、各自盛装して「定まった小屋」で過ごすというのが日課であった[13]。新聞は報じていないが、この「定まった小屋」は、自分たちが居住する家、そして踊りを披露する場所であったと思われる（なお、図５参照）。

日英博覧会に際して発行された「公式ガイド」（英語版）では、パイワン族が首狩の習俗を持っていたことを告げ、その所持している刀の鞘には首狩の成果を記念するペンダントが飾られていると紹介している。会場内ではそれらが見られ、戦いの踊りはスリリングであって、模擬戦を見ると、槍や弓矢の名手であることが分ると宣伝されていた（Commission of Japan-British Exhibition〈Shepherd's Bush〉1910?: 86）。この記述からすると、特定の場所で踊りなどの演技を提供するのがパイワン族の主要な任務であったことになる。そして、10時20分になって一日の仕事が終れば、自分たちの「小屋」で就寝というのが一日の生活の様相であった。

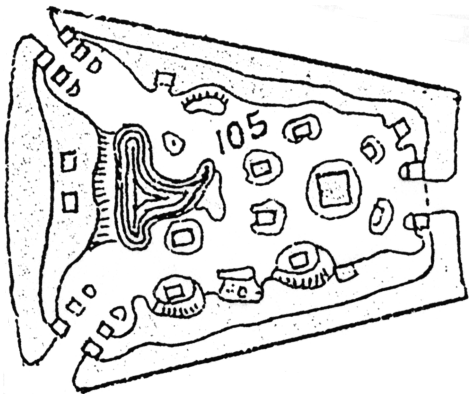

図５　「台湾村落」（パイワン族の居住区）見取り図

これは、図１の「台湾村落」の拡大図である。
出典：Commission of the Japan British Exhibition（Shepherd's Bush）1910?: 折込み図。

ロンドンでの日々

もちろん、パイワン族はこうしたありきたりの生活だけを過ごしていたのではない。毎日の暮らしが、見慣れない新しい文化の発見でもあった。ある時は、「便所の水が紐を引くと上からごぼごぼと落ちるのに驚き、どうして水が始終上の方にある」のかと不審に思ったことがある。また、「西洋人が男女手を組んで歩行するのを見て不都合だと憤慨した」こともある。なかには、すっかりとイギリスの生活に憧れ、いつの間にか英語を覚え、「サンキューとかモーニング」とか喋り、「日本語よりも英語が覚えやすい」と自慢する者まで現われた。さらには、ロンドンの流行に心を奪われる者も出てきた。「ハイカラになって跣足と裸体は耻かしい」と悟り、「外国婦人の真似をしたがり、靴下を買って呉れ、靴を買って呉れと監督者に迫る」女も出現したのである[14]。近代文明が華やかに咲き誇っていたロンドンで暮してみて、パイワン族は新しい文明の光を受け、新文化の流行を身に付けようとさえしていた。

長期間、異国で生活しているだけに思わぬ出来事が生じたこともあった。一行のなかには、故郷にいる間にすでに婚約していた男女がいて、ロンドンに来てからも密会を続けてきたが、開催期間中に妊娠してしまった者がいた。そこで、正式に結婚式を挙げることにしたところ、パイワン式の結婚式ということでロンドン中の評判になり、多くの見物人が押寄せたこともあった[15]。

帰郷するパイワン族

こうしたいくつかのエピソードを生みながら、パイワン族一行はロンドンでの生活を終え、故郷の台湾に戻った。ロンドンにいた時は様々な出来事があった。帰国直前に一人のパイワン族が盲腸炎のため死亡するという不幸があったし、挙式を終えた夫婦から男児が生まれるという朗報もあった[16]。ただし、一行の帰国は博覧会の終了日であったから、最後はあわただしかったことであろう[17]。

13）田原生「日英博の生蕃館（上）」『台湾日日新報』明治43年９月29日。
14）田原生「日英博の生蕃館（上）」『台湾日日新報』明治43年９月29日。
15）田原生「日英博の生蕃館（下）」『台湾日日新報』明治43年９月30日。
16）無署名「洋行戻の蕃人」『台湾日日新報』明治44年１月８日。
17）田原生「日英博余聞」（『台湾日日新報』明治44年11月28日）の記事によれば、英国から帰国の船便には日本郵船

一行はロンドンの帰途、神戸と大阪に立ち寄り、観光旅行をする。大阪城を見て壮大な建築に驚き、兵営を見学し軍事訓練の厳しさに感嘆の声を上げる様子が報道されている[18]。抗日の芽を摘み取るための方策として、先住民に発達した日本の実情を教え、その見聞を郷里で宣伝させるため、総督府はこれまでに日本への観光旅行を何度も実施していたが、当初からパイワン族に対しても同じ主旨の観光旅行の計画を台湾総督府は立てていたに違いない。

こうした長旅を終えてパイワン族が台湾の基隆港に帰港したのは、明治44年の１月７日であった[19]。出迎えの新聞記者に発した最初の一言は「グッドモーニング」であったというから、よほどロンドンでの生活が楽しかったのであろう。盛装を凝らしたなかに、ズボンやズボン下を着用し、足袋、下駄、草履を履き、女はネルの腰巻を着け、そして裏毛の外套まで着こなすなど、洋風化した姿態での帰国であった[20]。

パイワン族にとって、日英博覧会は新しい文明に触れる絶好の機会であった。それは、すべてが光り輝く異文化体験であり、計り知れない思い出を残した。帰郷後しばらくして、佐久間・台湾総督に謁見する機会を得る機会を得たパイワン族は、総督の質問に答え、こういう内容の話をする（台湾総督府警務局 1921：149）。

> ロンドン市街の宏壮で華麗。商工業品の精巧。機器・機関の雄大。人馬・物貨の往来。金銀財貨の融通流れる如く。

パイワン族にとって、ロンドンでの経験は得難いもので、おそらくは夢のような思い出であったに違いない。ところが、その夢見たロンドンは翌年に思わぬ形でパイワンの村に出現した。後で見るように、そこには異文化交流の豊かな世界が横たわっていた。とはいえ、こうしたパイワン族の思いとは別に、イギリス人のアジアへ向けた眼差しには消し去ることのできないオリエンタリズムの翳りが潜んでいたこともまた、見逃すべきではない。光の世界と翳りの世界が混濁した日英博覧会の会場は、さまざまな視線の交錯する、まさしく「接触領域（contact zone）」（Pratt, M. L. 1992：4）であった。

３）ロンドンのアイヌ民族

日英博覧会に登場したアイヌ民族は、北海道日高地方の住民で、２月９日に出発し、東京経由で門司に行き、21日に門司でパイワン族と合流し、渡英の旅に立っている。途中のインド洋では、暑さのため生れて初めての苦しみを味わう旅を経験しなければならなかった。アイヌについてのエピソードは、この船旅から始まる。この船上でアイヌ民族と同船することになった「台湾日日新報」の記者は、その体格に圧倒され、この段階ですでにアイヌとパイワンとの文化の差異に気づかされていた。アイヌ民族の清潔感に脱帽し、パイワン族との違いについて、こう記している[21]。

> 頭髪と髯鬚を茫々生えたる容貌魁偉の巨大漢あり。（中略）
> 一行は頻りに入浴と頭髪を洗うことに意を用い、その特臭を去るべく、常に香水を使用し居るとは、流石（さすが）我が蕃人より一日の兄とすべし。

ロンドンに到着したアイヌは、会場内の一区画に設営された「アイヌ村落」、正確には「アイヌ

の船舶が使われ、博覧会終了日には熱田丸が出航している。パイワン族を含め、４，50名がこの船に乗り込み、12月12日発の常陸丸では残りの100余名が乗船している。日本の職人・芸人のなかには、引続きヨーロッパ、アメリカへ巡業する者もいた。アイヌも博覧会終了と同時に帰国している。この事実から宮武は、アイヌは「単なる集客の道具として使われ」、「閉会するやいなや追われるように船に乗せられ、〈後始末〉された」と記述しているが（宮武公夫 2005：44）、そうではなく、船便の都合によるものであろう。また、滞在日数が増えれば、それだけ支給すべき日当がかさむことを考慮したのかもしれない。

18）関西太郎「洋行帰りの生蕃」『台湾日日新報』明治43年12月25日。
19）「英国行蕃人帰る」『台湾日日新報』明治44年１月８日。
20）「洋行戻の蕃人」『台湾日日新報』明治44年１月８日。
21）「渡英のアイヌ」『台湾日日新報』明治43年２月24日。

の家 The Ainu Home」に居住していた。そこには藁葺でできた５戸の家屋があり、総勢10人のアイヌは分散し居住していた。家屋内には「毒矢、熊刀、松前候より拝領の外着」（田中湄人 1910：36）などが飾りつけられ、アイヌ家屋の雰囲気を醸しだしていた。だが、こうした光景はあまりにも作為的であった。主催者としては、近代文明との対比のもとで、悠久な太古の世界、あるいは手付かずの原始そのものの世界を見せることで、見学者にロマンティックな情緒を呼び起こそうとしたのであろう。そのため、現実離れしたアイヌ家屋さえ出現した[22]（なお図６、７も参照）。日英博覧会の取材に訪れた「都新聞」の記者もまた、主催者の仕掛けた罠にはまり込んでしまったように見える。その記事は、こう書いている[23]。

> アイヌ人の村落も見物多く、太古の質素なる住家の光景、屋内に於ける簡易なる仕事等は近代に於ける東洋人の生活状態の変遷と対照して天地雲壌の差あることを面白く説明せり。

藁葺きの家は確かに質素である。この質素な生活を近代文明に対比させて語ること、ここにアイヌ家屋の展示の目的があった。東洋、すなわち日本の急速な近代社会の建設と対比させ、その発達の差異を「天地雲壌の差」として強調するために、この「アイヌの家」は建設されたようである。

会場内でのアイヌの生活を語る資料はきわめて少ないとはいえ、皆無ではない。雑誌『太陽』には、「博覧会初日の印象」と題した記事が掲載されていて、「アイヌ村の大繁盛」という見出しが見える。見物人が家の中を覗き込むごとに、アイヌの老人は丁寧に両手を伸ばしてお辞儀していたというから、この光景からはまさに「人間の展示」の場面を思い起こさせる。この老人は見学者の質問にはよく答えていた。「百匹の熊を殺した剛の者」で、「熊にさし込む毒矢の説明やら、アイヌの宗教のこと、酒を飲む時の特別の儀式」など、通訳を交えて語っていた（内ヶ崎作三郎 1910：46–48）。見られるだけの存在だったにしても、アイヌは精一杯、与えられた境遇に応対し、文化の伝達者としての自尊心を失ってはいなかった。

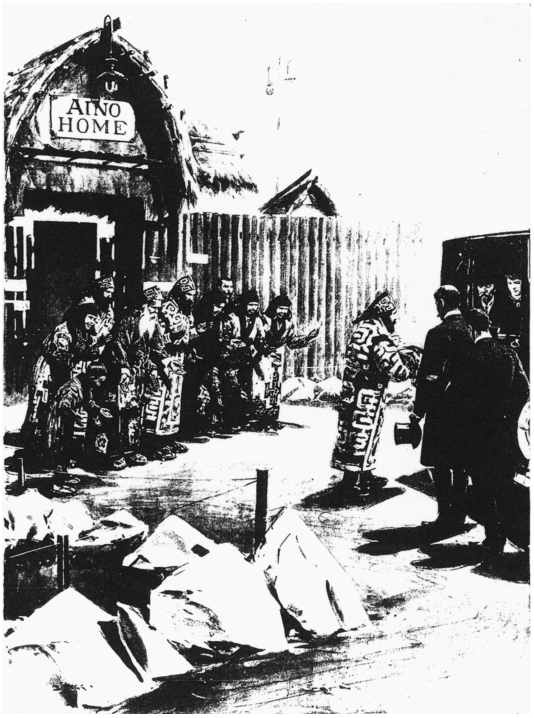

図６　イギリス国王を迎えるアイヌ

この写真は「アイヌ村落」の前で、参観に来たイギリス国王を出迎える場面。正門の造りに作為性を感じる。
出典：*The Illustrated London News,* 1910年８月13日。

日英博覧会での英語版の「公式案内書」、*Japan -British Exhibition 1910 : Official Guide* にはアイヌの活動の姿がかすかに分る記載がある。会場のアイヌの家では木彫り、刺繍が見られること、男は長い垂れ髪でビーズ玉の装飾を持っていること、女は口元にイレズミをしていること、などである。アイヌの信仰行事として熊祭の記載もある。この会場で実演されたかどうか、この記述からは確かなことは言えないにしても、その可能性は十分に推測できる（図７）。アイヌの風俗習慣、宗教と信仰などの概略を３ページにわたって記述している「公式案内書」で興味深い記載は、アイヌの身体形質に触れ、アーリア系と説明して

22）最近、宮武公夫（2009）は日英博覧会でのアイヌ関係の写真を多数、公開している。
23）「日英博覧会開会」『都新聞』明治43年５月16日。

図７　「アイヌ村落」の内部の光景

写真説明では「熊祭の宴」であるという注釈がついていて、実際に行われていたと推測される。
出典：*Souvenir Album of the Japan-British Exhibition 1910*（山路勝彦所蔵品）。

いる箇所である（Commission of Japan-British Exhibition〈Shepherd's Bush〉1910?：87）。アイヌに「白人性」を認める見解は当時のヨーロッパではかなり流布していて、この「公式案内書」はその俗説にしたがっての説明にすぎない。しかし、ここに一つの皮肉がある。ヨーロッパ人に「黄色」と認定され、そのことで劣等感を抱いていた日本人は、このアイヌ「白人説」に同調することなどできなかった、ということである。宮武公夫（2005：35–41）が説くように、日本とアイヌとは支配と被支配という非対称的関係にある一方で、日本のアイヌに対する位置づけと、イギリス人のアイヌの位置づけとは相容れなかったことが、この日英博覧会では露呈されたのである。

パイワン族と同じように、ロンドンに来たアイヌ民族は異文化の目新しさに驚愕の気持ちを抑え切れなかったし、またそこから異文化理解を試みようと努力を怠らなかった。すでに宮武公夫（2005：44–45）、深沢百合子（2009：3）が紹介していることだが、『デイリー・ニュース』（1910年11月２日）には、帰国直前のアイヌの語ったロンドンでの生活の感想談が記載されている。その感想談とはポーランドの人類学者、ピウスツキーに託したもので、内容は次の通りであった（Hirokichi, Mutsu ed., 2001：180–181）。

私たちは以前は知らなかった多くのことを学びましたし、いくつものものを見て驚きました。それは、地上から噴き出たり、消えたりしたら、また家にまで来たりする水でありました。ボタンを押すと地上から光が発し、その光は目の前にある山にまで達したのを見ました。始まりと終わりのないほど、長い町には驚きました。自分で走る自動車、数え切れないほどの人々の群れ、人の上に人が住む建物、見たことのない不思議な動物たち、これらはすばらしかったです。背の高い男女を見て楽しかったです。
しかし、すべてのなかで、イギリス人の親切さにはたいへん魅惑されました。イギリス婦人の親切で優しい心には、さらにもっと魅惑されました。我々が賞賛したどんなものよりも、このことを感謝しているので、故郷に帰ったら「善良な婦人」のいる、豊かなこの国について仲間に話したいと思います。その話は、子供や孫たちに伝えられていくであろうと思います。

この文章は日本語から英語に翻訳されたものに間違いなく、翻訳の間違いがないとは言えない。そうだとしても、アイヌ民族が実感した異文化へ

の畏敬の気持ちは謙虚である。パイワン族もまた同じ感情を抱いていたに違いなく、イギリス人の優しさに感動した気持ちは帰国後のパイワン族の村でも再現された。パイワン族がロンドンで経験した話は、先に触れたように『台湾日日新報』や『理蕃誌稿』に記録として残っていて、実際に故郷に帰ったパイワン族は洋行帰りの楽しさを村人に語って聞かせていた。そればかりではない。パイワン族が帰国した翌年（1912年）、一人の若きイギリスの植物学者、プライスがこのパイワンの村、クスクスを訪れ、しばらく滞在している。それまでパイワン族と面識を持っていなかったし、突然の訪問であったにかかわらず、プライスは温かい歓迎を受けた。訪英したパイワン族は、イギリスに対して数々の思いを持ったことであろうが、個人として接した時のイギリス人の優しさには魅了されていたようである。プライスとの出会いを『台湾日日新報』は、こう伝えている[24]。

> 英国で大切にされた恩義忘れ難く、プライス氏と云う英人が来たと云うので、今迄畑を耕して居た蕃君も早速、鍬を投出して握手を求める。「グッドデー」「サンキュウー」等と盛んに空覚えの英語を連発する。流石（さすが）に同氏は意外のところで、意外の人間から、意外に自分の国語を話されたので、大に喜び、当方も負けずに「サンキュー、サンキュー」を繰り返した相（そう）だ。蕃君は「何でも英国に居た時の恩返しをしなけりやならぬ」と云うので、一族に召集令を発して、見ず知らずのプライス氏の歓迎会を開催した。「英人さんにはビールが好かろう」と云うので、里へ出て、半打（はんだーす）、買って来る。米粉を買って焼米粉にする。コテコテと蕃、湾、洋の三式料理の御馳走をした。プライス氏の方からウイスキーと缶詰を彼等にやると、猶猶（なおなお）、大喜び。「サア、踊ってお目に掛けなけりゃならぬ」と、……蕃人の踊りをやったのだ。

この一文からは、イギリスという異国の地におけるパイワン族の位相が浮かび上がる。それは、かの博覧会がたとえ見せ物興行にすぎなかったにしても、キラルフィーの意図から離れた位相にパイワン族は立っていた、ということである。ロンドンにおけるパイワン族は、文化の差異を乗り越える出会いの場を見出していた。そのために、突然訪れたイギリス人に対して友好的でありえた。北海道のアイヌと台湾のパイワン、この日本の辺境に住んでいた人々の異文化体験は、現在の我々の心を揺さぶるほど豊かであった。

4　「人間動物園」と日英博覧会

前章で見たアイヌ民族とパイワン族以外に、博覧会場をおおいに賑わせた出し物は日本人を主役とする余興の数々であった。結論的に言えば、それらの余興は日本に関わる、もしくは日本の表象として実演されていて、実はこの展示こそが「人間動物園」の実情をはっきりと示している、と言えるのであった。すでに紹介したが、アイヌ、パイワン関係を除いた他の余興について、再度、農商務省の報告書を取り上げてみたい（農商務省 1912：867）。それによると、「会場内ニ日本家屋数軒ヲ建築シ、其ノ内ニ於テ日本物品ノ製作、実演ヲ為スコト」という記述がある。さらに、「パノラマ的ナル我田園ノ模型」を示すという記述が続く。そして、「本邦演劇」と「独楽、曲芸、手品、山雀芸、水芸等」が挙げられ、また「活動写真」と「要馬術」の記載が続く。

これらの余興の選択は、最終的に日本側博覧会関係者が「品位ヲ損スルモノハ一切許容セサルコト」という条件で（農商務省 1912：867）、イギリス側の博覧会担当者の要請を受け入れて決めた結果である[25]。これらのうち、「馬術」は実施されなかった。独楽、曲芸、手品、山雀芸、水芸等に携わる職人、芸人を含め、参加者の一覧は表１に記載しておいた。

余興の参加者の一団は「フェアー・ジャパン

24）無署名「生蕃人の日英同盟：プライス氏歓迎される」」『台湾日日新報』明治45年６月７日。
25）ただし、実際には素行の悪い職人や芸人はいた。霧都生「日英博の昨今（下）」（『台湾日日新報』明治43年11月１日）には、日本町、宇治村の日本人、芸人の素行の悪さを非難する記事がのっている。「日本町などにては賭博盛ん」という記述がある。

表1　日英博覧会参加の芸人と職人：職種と人員

職業別	員数 男	員数 女	職業別	員数 男	員数 女	職業別	員数 男	員数 女
挽物工	1		麻裏職	1		扇工	7	
理髪人	1		独楽廻し	1		陶器工	10	
生花茶ノ湯	2		藁細工	2		蒔絵工	4	
軽業	14	11	傘工	2		印刷	2	
造花		3	新粉細工	5		七宝工	4	
剣舞	2	2	画工	5		囃方	1	1
指物	2		菓子職	3		陶器画及彫刻	1	
桶屋	2		提灯職	1	1	麦稈細工	2	
籠細工	1	2	木版印札	1		編物		1※※
太神楽	5		イス、テーブル盆類・彫刻	2		漆師	1	
通事務役員	6		鍛冶	5		大工	1	
飴細工	2	1	彫刻	8		建具職	1	
事務所給仕	1		奇術	4	7	宮師	2	
錺り職	1		興行人	2	1	植木職	2	
縫箔		2	銀細工	1	1	芝山象嵌	2	
丸太乗	1		金属彫刻	2		刺繍		3
料理人	4		陶器画工	3		染物職	3	
裁縫	1	4	象牙彫刻	6		畳職	1	
綿細工	2		角力	35※		機械工	1	3
紙細工	1	1	アイヌ監督	1				
金属打物	1		アイヌ	6	4	計	187	48
							総計	235

※大碇鳳凰ノ一行　　※※生花ヲ兼ヌ

出典：農商務省 1912：870–872

ただし、表記は変えている。原典において人数の総数は合っていない。

図８　フェアー・ジャパンの光景

和服姿と日本式建築様式、いずれも日本を表象する場面である。
出典：*Souvenir Album of the Japan-British Exhibition 1910*（山路勝彦所蔵品）。

図９　「宇治村」の風景

会場内には「宇治村」が作られ、日本の農村が再現された。
（a）和服姿の日本人　　（b）その見学者
出典：（a）*Souvenir Album of the Japan-British Exhibition 1910*（山路勝彦所蔵品）。
（b）Commission of the Japanes-British Exhibition 1911、折込み写真。

（Fair Japan）」と称される「日本人街」で活動することになる。そこは、あたかも市街をなすように日本家屋が21軒並び、3900坪の面積を占める広い空間であった（図８）。その家屋群は、陶器製造、象牙細工、七宝細工、席画、彫刻、造花、漆塗、刺繍、菓子製造、その他の手芸者に割り当てられ、それぞれの職人は各自の実演をし、また日本製品の販売をしていた（農商務省 1912：873）。

日本の職人が活動する場所はさらに別に一区画あり、それは「ポエティック・ジャパン（Poetic Japan）」、すなわち「詩的日本」と呼ばれていた（図９）。その広さは1290坪ほどで、「宇治村」という日本農村の風景が再現され、８軒の日本家屋が建てられていた。ここには水車小屋も作られ、藁葺きの家屋のなかでは桶、鍛冶、機織、紡糸、綯縄などの職工の実演が行なわれていた（農商務

省 1912：873)。

こうした職人、芸人の一団は当初、会場付近の住家を借用していたが、不便を感じたため余興場の建物に移り住んだ。こうして、アイヌ民族、パイワン族とともに、日本人の職人、芸人が同じ会場内に住むようになる（農商務省 1912：874–5)。さながら会場は、実質的に多文化日本を思わせる世界に変貌したのである。なお、このほかにも相撲の興行団が参加している。大関まで昇進したが、転じて京都相撲に走った強豪の大碇が一座の中心であった。相撲の興行はロンドン名物になり、その派手な活躍は写真として残されている(図10)。とくに大碇にはイギリス人紳士のひいきで500円もする化粧回しが贈与されたというほど、人気は高かった[26)]。

博覧会は時代の先端をいく産業技術の展示が主たる目的で開催されたにせよ、一方で客寄せのために各種の余興がもてはやされたことは、どの博覧会でも共通している。それらの余興が人々の歓心をそそり、博覧会の雰囲気を熱気で満たす結果を生むことはいずこでも同じである。日英博覧会でも、日本人による余興はイギリス人に多大な興味を引き起こした。次の引用文は日英博覧会の公式案内書に書かれた、日本人街、「フェアー・ジャパン」の紹介記事である。そこには客寄せのための謳い文句が散りばめられている（Commission of the Japan-British Exhibition〈Shepherd's Bush〉1910?：85)。その文章を通して、イギリス人の東洋趣味を誘発する余興の世界がそこかしこで繰り広げられていた光景を思い浮かべることができる。

> 魅惑的な場所はフェアー・ジャパンであり、多くの模擬店、古風で趣のある開放的な仕事場、現地風家屋、神聖な神社、余興の会場がある。朝から夜まで活気に富んでいる…東洋の活気が…。日本を訪問したことがない人たちに、この愛しい国の雰囲気を感じさせてくれる。

さらにこの公式案内書は、「ポエティック・ジャパン」に作られた「宇治村」の農村風景をロマン的に描き出している（Commission of the Japan-British Exhibition〈Shepherd's Bush〉1910?：85–86)。

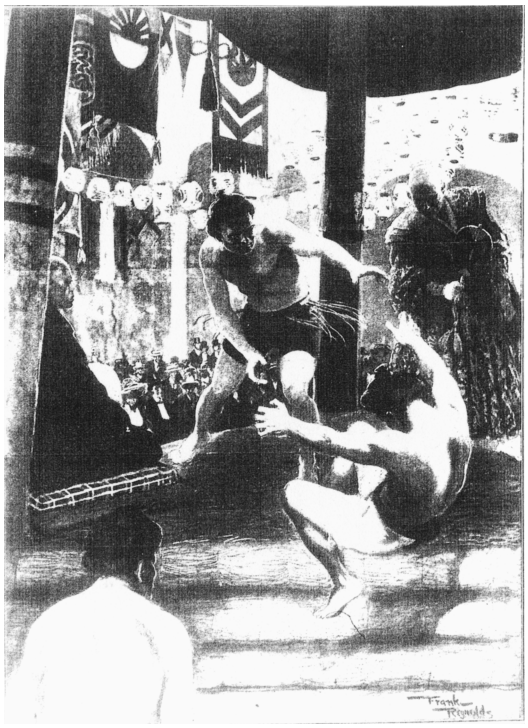

図10　日英博覧会での相撲興行

出典：*The Illustrated London News,* 1910年7月9日。

> グレイト・ホワイト・シティの日本村は、「東洋の英国」の農村生活を勉強するすばらしい機会を与えてくれる。藁葺きの家屋があり、現実とそっくりな舞台背景のもとで、この場所は絵画的であると同時にまったく詩的でもある。街のはずれには日本でもっとも崇敬されている樹木——桜がある。その向こうには明るい赤色の鳥居があって、石灯篭を通って寺院に続いている。日本の農民は水田や家内工業に勤しんでいる。絹織物や木綿の紡績と並んで、日本の主要な産物である茶や米の栽培が展示されている。女たちは、現地の衣服を着け、輝いたハンカチを頭に捲いて

26）田原生「閉会近き日英博」『台湾日日新聞』明治43年11月6日。

かわいらしく見える。ある者は衣服を洗濯し、他の者はきゃしゃで小さな茶屋で世間話をしている。至る所に、特徴的で独自な美しい農村生活がある。

グレイト・ホワイト・シティとは、白亜の建物が立ち並ぶことに由来する名称で、この博覧会場を指す。その会場光景は、あまりに「詩的」である。多くのイギリス人は、こうした作られた日本村を訪れ、期待通りの日本が再現されているのを目撃し、感嘆を禁じえなかったに違いない。展示された家屋を見て廻り、足を止めて中を覗き込んだ人たちは、そこで異国情緒を楽しむことができた。指先の器用な日本人、鮮やかな手仕事の日本人、噂どおりの日本人に関わる光景を今や目前で見ることができる。東洋のはずれにある日本を表象するすべてが、そこには備わっていた。実際に、家の中で日本の女が器用に針仕事をしているのを見て、熟練した指先の動作に舌を巻いた多くのイギリス人もいた[27]。多くのイギリス人にとって、この博覧会は日本を知る初めての異文化体験の機会であったから、見るものすべてが興味深かったに違いない。

しかしながら、その反面、見せ物として扱われることに対して反発する日本人も数多くいた。当時の新聞記事は、こうした反発的な意見を多数、伝えている。大阪朝日新聞社に属し、日英博覧会を報道するためロンドンに派遣された長谷川如是閑は、日本人がイギリス人から蔑まされていると直感し、会場に満ち溢れていた雰囲気を厳しい口調で批判している[28]。

ポエチックジャパンと称して日本の田舎の生活を其儘実演して見せる所がある。一寸入って見たが如何にも人を愚にしたもので到底日本人には見て居られない。

同様な批判は、ほかにも見ることができる。日本の農民の仕事ぶりを見せる場面であり、それはアイヌやパイワンの起居動作を見せる場面と変わりはない。新聞記事は、こう伝えている[29]。

百姓が内地で行（や）るのと同じ風体で半裸体に鍬を擔ぎ僅か一坪計りの田を耕して見せる…。

長谷川如意閑の発言は、日が経つにつれ、激しさを増していく。興行を企画したシェファーズ・ブッシュ社への激しい怒りはとどまるところを知らない[30]。

会社が企てたる日本に関する余興の興行物は一つとして日本の迷惑ならざるは無く、……。
会社が最も力を入れたるはファー・ジャパンという日本村なるが、未だ半出来にて客も少なけれど、既に提灯屋、竹籠屋、木版屋、造花、象牙細工、芝山細工、木彫、漆器、陶器、銀象眼、日光細工、煎餅、飴細工等開店し居り。変手古な日本家庭の内にて余り標本的とは申し難き程の日本人が何れも迷惑相な顔をして仕事をして居る具合は、……。

そして、長谷川はとうとう怒りを顕わにし、イギリス人はまるで動物園に来たような感覚で会場を見て廻っていると憤慨し、かえって動物園の檻に閉じ込められたようなパイワン族に同情し、こう言う[31]。

此の土人等は偶々日本人が入ると、付添い人より皆台北の人と云い聞かされ居るより大いに懐かしがり、一々お辞儀をして、中には日本語にて挨拶するものあり。憐れとも、何とも申す様なく、之を多くの西洋人が動物園か何かに行ったやうに小屋を覗いて居る所は些か人道問題にして、西洋人はイザ知らず、日

27）無署名「日英博覧会開会」『都新聞』明治43年５月16日。
28）長谷川如意閑「日英博覧会（五）」『東京日日新聞』明治43年６月14日。
29）無署名「国辱の博覧会（上）」『都新聞』明治43年７月23日）。
30）長谷川如意閑「日英博たより（三）」『東京日日新聞』明治43年７月６日。
31）長谷川如意閑「日英博たより（三）」『東京日日新聞』明治43年７月６日。

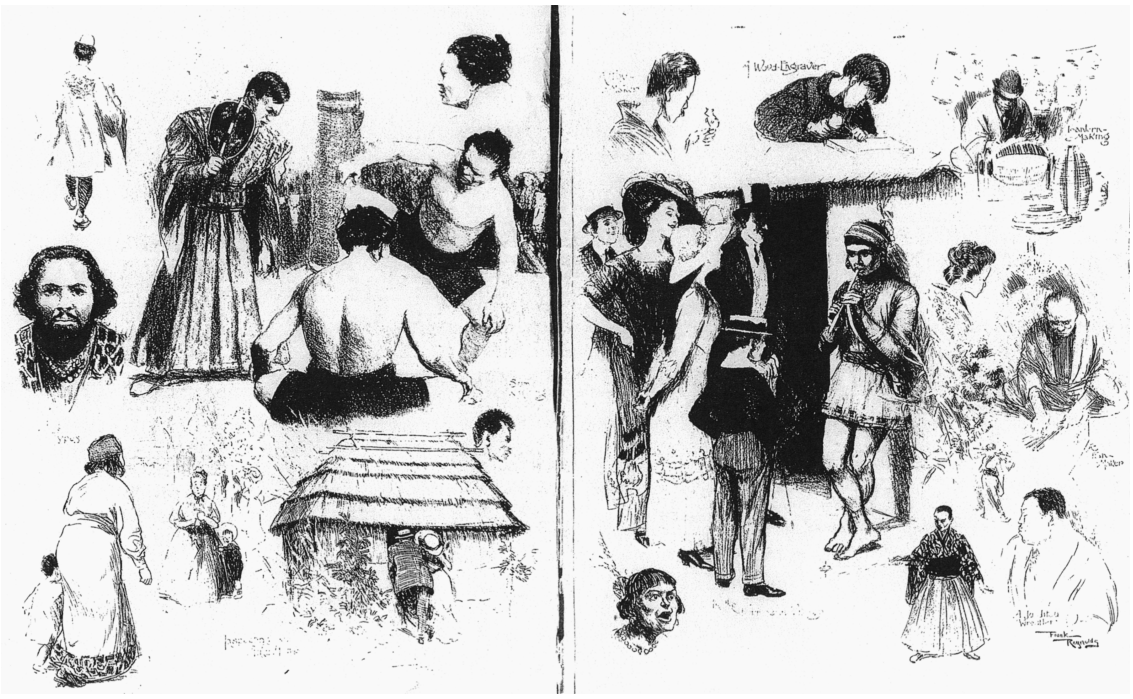

図11 「人間展示」のスケッチ

このスケッチの中央には門口に立って笛を吹くパイワン族が描かれ、イギリス人家族が珍しそうに聞き入っている。アイヌの家を覗く人もいる。日本の相撲は珍しがられたし、職人たちにも好奇な眼差しが向けられていた。
出典：*The Illustrated London News,* 1910年7月9日。

本人は決して好んでかかる興行を企てまじき事と存じ候。

ここに一枚の参照すべきスケッチがある。ロンドンの写真週刊誌、*The Illustrated London News* の記事であり、その一枚のスケッチの左下の部分には、イギリス人がアイヌの家を覗き込む場面がある（図11）。遠慮することなく他人の家を覗き込む光景は、アイヌを人間として見ることなく、あたかも動物園の檻の中を覗き込んでいるに等しい印象を与えている。似た光景は、右側の中央で、口笛を吹くパイワン族を物珍しそうに眺めているイギリス人家族にも見ることができる。パイワン族はただ自文化の紹介者とし意識しているのかも知れないが、この場面ではイギリス人の好奇心の対象であるにすぎない。こうしたスケッチからは、「生蕃人ノ生活状態ヲ作ラシメ公衆ニ示ス」（付録1、参照）という日英博覧会での余興の目的が真実味を増してくる。見る人（イギリス人）と見られる人（アイヌ民族、パイワン族、日本人）との間には越えることができない溝があった。

そればかりではない。このスケッチには大相撲の力士と行事が描かれている。これらの相撲関係者は、客寄せのための演出者として、やはり好奇心をそそる見せ物興行の一員として位置づけられていたのである。同時に、日本人の職人たちもまた描かれている。この図からははっきりとその工芸の種類を特定できないが、「木彫職人」、「提灯作りの職人」の文字だけは読み取れる。このスケッチの題目（副題）は「日英博の登場人物と珍奇なるもの Characters and Curiosity at the “Jap-Anglo”」であり、「多くの日本人とアイヌ、それに台湾人がシェファーズ・ブッシュの日英博では見ることができる。日本人は故郷での美術工芸にこつこつと精を出し、あるいは相撲を見せている。アイヌと台湾は故郷と同じ生活を見せている」という説明がついている。アイヌ、パイワン

と一緒に日本人もまた日英博で展示され、それこそ「人間動物園」に入れられていたのである。

実際に、長谷川如意閑以外にも、こうしたイギリス人の態度に憤慨する新聞人はいた。何度も紹介している台湾日日新報の記者もまた、憤懣を抱いていた一人であった。「見せ物とされたは不感服」という表題で、その記者は語っていた[32]。

> 此の日英博には〈小日本〉と云う日本の各種職業を網羅した一部落がある。又〈宇治村〉と云う農業者から成り立った一部落があって、共に六片（ペンス）の入場料で見せ物となって居る。生蕃館もアイヌ館も同様、一の見せ物に過ぎない。キラルヒーなる博覧会代表者の欲深い猶太人が此等のものを呼物として博覧会の繁昌させる手段に供せられたので、我々は此の仕打ちに甚だ不感服であるが、今更後悔しても取り返へしの付く話でないから泣寝入の外はない。

図９の「宇治村」の光景をここでも参照していただきたい。水車が廻り、牧歌的な農村を和服姿の日本人が歩いている。この宇治村で起居する農民で、その立ち居振る舞いもまた展示の対象にされていた。こうした見せ物扱いに憤慨したのが件の記者であった。「泣き寝入り」しなければならないほど屈辱感を抱いた記者が、名指しで非難する人物はキラルフィーである。彼こそが、この博覧会の呼物としてアイヌ、パイワン、そして多種多様な日本の芸人・職人の招聘を求めた中心人物の一人にほかならない。長年にわたって博覧会を開催してきた実績を持つキラルフィーは、観衆動員の方法を熟知していた。これに対して、日本側、とりわけ台湾総督府はそのキラルフィーの戦術に乗せられてしまったようである。この記者は繰り返し日英博で受けた屈辱を告白している[33]。

> 仮令キラルヒーの請求ありたればとて日本町に宇治村、アイノに生蕃、角力に柔術、芝居に軽業、総ゆる我国の下級に属する賤民芸人を寄せ集めて種々の醜態を演ぜしめ恥の上塗を為せしむは深く残念千万。

当時、政治家の原敬も同じ発言をしていて、日英博覧会を推進した小村寿太郎外相に対して厳しい批難を浴びせていた。原はキラルフィーを「山師」とこきおろし、暗に外相をも「国民を欺きたるもの」と容赦しない（原奎一郎編 1965：57）。日英博覧会の余興が「きわもの」として仕組まれていたことを原敬は見抜いていた。

とはいっても、日英博は、日本政府、とりわけ主催者の農商務省の思惑から離れ、希代の興行師であったキラルフィーの目論見どおりに進行していった。台湾総督府が余興部シンジケートと契約を交わした内容には、先に見たようにパイワン族を「生活状態ヲ作ラシメ公衆ニ示ス」という箇所があり、パイワン族を展示の対象として扱っていたことが示されている。しかしながら、台湾総督府がイギリス側の意図をどこまで理解していたのかは疑問が残る。19世紀、ヨーロッパを風靡した「人間動物園」に精通していたキラルフィーの正体は、日本政府と関係者、そして台湾総督府には掴めていなかったようである[34]。確かに、日本でも明治・大正にかけての博覧会では、西欧の方式を真似て植民地の住民を展示するということが行なわれていた（山路勝彦 2008）。しかしながら、日本政府は海外での興行経験に乏しかった。そのため余興の企画・運営はイギリスのシンジケートが主導的役割を果たし、イギリス側のもくろみで進行した（宮武公夫 2005：24-26）。農商務大臣の大浦兼武が小村外相に送った書簡（明治42年９月30日付）にも、そのことが示されている。すなわち、「余興ノ組織経営ハ一二〈キラルフィー〉氏ノ権域内ノコトトナシ」という文言が見える（外務省〈外交資料館〉1909c）。こうして余興部シンジケートが雇入れ交渉を受け持ち、「魔術並女水芸一座」をはじめ、「農民」、「台湾生蕃」、「北海道アイヌ」など29種が対象になった（外務

32）田原生「日英博の生蕃館（下）」『台湾日日新報』明治43年９月30日。
33）田原生「日英博所感」『台湾日日新報』明治43年11月29日。
34）ただし駐英大使・加藤高明は小村外相宛の書信（明治42年８月24日付）で、キラルフィーが利己的人物だという新聞紙上での評判は誤謬だとして、キラルフィーを擁護している。外務省〈外交資料館〉1909b、参照。

省〈外交資料館〉1909d)。

こういう経緯を踏まえた博覧会であったが、ロンドンでは様子が変わっていた。近代日本では「民族の階層秩序」が形成されていて、頂上に日本人、下層にアイヌや台湾先住民という図式が作られていたにしても、大英帝国においては日本人も、アイヌ民族もパイワン族もオリエント（東洋）の住民にすぎなかった。等しく同じような視線を投げかけられ、珍奇な「人間動物園」に押し込められていたのである。日清・日露の戦争の勝利で帝国の地位を駆け上がり始めた日本ではあったが、大英帝国の前ではひ弱で未熟な帝国でしかなかった。皮肉なことに、日英博はその事実を認識させる機会にもなった。一説によると600万人の参観者を集めたというほど成功裏に終った日英博ではあったが（堀田陵子・リスター 2002：227)、日本人には深い傷跡を残す結果となった。ただし、日英博覧会には日本庭園の美を紹介する施設もあった。日本の高度の造園技術を存分に発揮して設営された、「浮島園」と「平和園」と呼ばれる庭園である。これらの庭園がイギリス人の人気を集めたことは、疑いない。本稿では「余興」という側面に焦点を絞ったため、触れることができなかったが、その紹介は別の機会に譲りたい。その光景は大量の絵葉書としても残されている。

最後に一言。帝国の見せ物ではあったが、この博覧会には救いがなかったわけではない。それは、アイヌやパイワンに見る異文化理解のありようであった。ロンドンで見世物とされつつも、アイヌ民族やパイワン族は異文化理解への努力を惜しまなかった事実は、ここでも強調しておいてよい。帝国主義が隆盛をきわめ、栄華を見せつけた時代、「人種主義」に基づいた見せ物展示に熱狂していた時代に行なわれた日英博覧会でも、この両民族は、単に歴史の一齣として語るだけでは済まされない豊かな世界の存在を後世に残してくれたのである。それだから、アイヌやパイワンの貴重な体験を抜きにして日英博覧会を語ろうとすれば、それは空疎な内容でしかないだろう。人類学が歴史研究で貴重な貢献をするには、こうした微細な人間模様を描き出すことにあろうと思う。アイヌ民族やパイワン族がロンドンでの生活をどのように生きたのか、この視点から日英博覧会を考え直すのが本稿の意図するところであり、この点にこそ日英博覧会の意義を認めたいのである。

引用文献

内ヶ崎作三郎　1910「開会初日の印象」『太陽』臨時増刊16巻9号：37–53。

演劇「人類館」上演をさせたい会　2005『人類館：封印された扉』大阪：アートワークス。

大谷繞石　1910「日英博覧会瞥見」『太陽』臨時増刊16巻9号：15–28。

河村一夫　1981a「明治四十三年開催の日英博覧会について（上)」『政治経済史学』181：28–38。

――――　1981b「明治四十三年開催の日英博覧会について（中)」『政治経済史学』186：32–43。

――――　1982「明治四十三年開催の日英博覧会について（下)」『政治経済史学』190：18–26。

国雄行　1996「1910年日英博覧会について」『神奈川県立博物館研究報告（人文科学)』22：65–80。

外務省〈外交資料館〉1909a「日英博覧会計画ノ概要」『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件（一)』(外務省外交資料館所蔵)

――――――――　1909b「日英博覧会ニ関スル件」『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件（二)』(外務省外交資料館所蔵)

――――――――　1909c「外務大臣伯爵小村寿太郎宛・明治42年9月30日、農商務大臣男爵大浦兼武差出)」『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件（二)』(外務省外交資料館所蔵)。

――――――――　1909d「余興種類決定通知ノ件」『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件（二)』(外務省外資料館所蔵)。

週刊朝日編　1981『続・値段の明治大正昭和風俗史』、東京：朝日新聞社。

台湾総督府警務局　1921『理蕃誌稿』第三編上、台北：台湾総督府警務局。

竹沢尚一郎　2001『表象の植民地帝国：近代フランスと人文諸科学』京都：世界思想社。

田中湄人　1910「日英博覧会大観」『太陽』臨時増刊9巻6号：31–37。

永原陽子　2000「博物館のなかの先住民」『歴史評論』601号：60–69。

農商務省　1912a『日英博覧会事務局事務報告』(上)、東京：農商務省。

――――　1912b『日英博覧会事務局事務報告』(下)、東京：農商務省。

原奎一郎編　1965『原敬日記』(第3巻)、東京：福村出版。

深沢百合子　2009「1910年にロンドンに行ったアイヌの人たち」『東北大学大学院国際文化研究科同窓会会報』7号：3。

堀田綾子・リスター 2002「1910年日英博覧会の主催者たち」、イアン・ニッシュ編『英国と日本：日英交流人物列伝』、東京：博文館新社、pp224-238。
松田京子 2003『帝国の視線：博覧会と異文化表象』東京：吉川弘文館。
宮武公夫 2005「黄色い仮面のオイディプス：アイヌと日英博覧会」『北大文学研究科紀要』115：21-58。
――― 2009「1910年日英博覧会におけるアイヌ展示：ハンマースミスとフルハム文書館および地域歴史センターにおける写真資料を中心に」『北海道開拓記念館研究紀要』37：115-128。
山路勝彦 2008『近代日本の植民地博覧会』、東京：風響社。
吉見俊哉 1992『博覧会の政治学：まなざしの近代』（中公新書）、東京：中央公論社。
無署名〈雑誌『太陽』記者〉1910「日英博覧会前記」『太陽』臨時増刊16巻9号、pp2-15。
Blanchard, P., Bancel, N., Boëtsch, G., Deroo, Ē., Lemaire, S. & C. Forsdic eds., 2008 *Human Zoos: Science and Spectacle in the Age of Colonial Empires.* Liverpool: Liverpool Univ. Press.
Boëtsch, G. & P. Blanchard 2008 "The Hottentot Venus: Birth of 'Freak'", in Blanchard, P. Bancel, N., Boëtsch, G., Deroo, Ē., Lemaire, S. & C. Forsdic eds., *Human Zoos: Science and Spectacle in the Age of Colonial Empires.* Liverpool: Liverpool Univ. Press.: 62-72.
Commission of the Japan-British Exhibition（Shepherd's Bush）1910? *Japan-British Exhibition, 1910, Official Guide.* Derby & London: Bemrose and Sons Limited.
Commission of the Japan-British Exhibition 1911 *Official Report of the Japan-British Exhibition 1910,* London: Unwin Brothers Ltd.,
Hotta-Lister, Ayako 1999 *The Japan-British Exhibition of 1910: Gateway to the Island Empire of the East,* Richmond: Japan Library.
Mackenzie, John 2008 "The Imperial Exhibition of Great Britain", in Blanchard, P. Bancel, N., Boëtsch, G., Deroo, Ē., Lemaire, S. & C. Forsdic eds., *Human Zoos: Science and Spectacle in the Age of Colonial Empires.* Liverpool: Liverpool Univ. Press.: 259-268.
Maxwell, Anne 1999 *Colonial Photography & Exhibitions: Representation of the 'Native' People and the Making of European Identities.* N.Y.: Leicester Univ. Press.
Mutsu, Hirokichi（陸奥広吉）ed. 2001 *The British Press and the Japan-British Exhibition of 1910,* Melborne: Curzon.
Pratt, M. Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation.* London: Routledge.

新聞記事（文章として引用したものに限る）

関西太郎 1910「洋行帰りの生蕃」『台湾日日新報』明治43年12月25日。
霧都生 1910「日英博の昨今（下）」『台湾日日新報』明治43年11月1日。
田原生 1910「日英博の生蕃館（上）」『台湾日日新報』明治43年9月29日。
田原生 1910「日英博の生蕃館（下）」『台湾日日新報』明治43年9月30日。
田原生 1910「閉会近き日英博」『台湾日日新報』明治43年11月6日。
田原生 1910「日英博余聞」『台湾日日新報』明治43年11月28日。
田原生 1910「日英博所感」『台湾日日新報』明治43年11月29日。
無署名 1910「渡英のアイヌ」『台湾日日新報』明治43年2月24日。
無署名 1910「日英博の生蕃とアイヌ」『台湾日日新報』明治43年5月26日。
無署名 1911「英国行蕃人帰る」『台湾日日新報』明治44年1月8日。
無署名 1911「洋行戻の蕃人（1）」『台湾日日新報』明治44年1月8日。
無署名 1911「洋行戻の蕃人（2）『台湾日日新報』明治44年1月9日。
無署名 1911「洋行戻の蕃人」『台湾日日新報』明治44年1月10日。
無署名 1912「生蕃人の日英同盟：プライス氏歓迎される」『台湾日日新報』明治45年6月7日。
田中湄人 1910「日英博覧会開会」『都新聞』明治43年5月16日。
無署名 1910「国辱の博覧会（上）」『都新聞』明治43年7月23日。
長谷川如意閑 1910「日英博覧会（五）」『東京日日新聞』明治43年6月14日）。
長谷川如意閑 1910「日英博たより（三）」『東京日日新聞』明治43年7月6日）。

補注

図6："Hairy Ainos before the King and Queen: A unique Presentation", *The Illustrated London News,* 1910年8月13日。
図7：*Souvenir Album of the Japan-British Exhibition 1910,* Dundee & London: Valentine & Sons, Ltd.
図10："Wrestling to help the Dead towards Nirvana", *The Illustrated London News,* 1910年7月9日。
図11："Leaves From an Artists Sketch-Book: The Anglo-Japanese Exhibition, as seen by Frank Reynolds", *The Illustrated London News*, 1910年7月9日。

付録 1

日英博覧会へのパイワン族の参加に関して、台湾総督府警務局（1921：149-151）には、次のような契約書が掲載されている。

契約書

明治四十三年二月二十一日、大嶋久満次ヲ甲トシ、日英博覧会余興部シンジケートヲ乙トシ、台湾生蕃人ヲ日英博覧会ニ出場セシムル件ニ付、契約ヲ締結スルコト左ノ如シ。

一、甲ハ日英博覧会開会中、台湾生蕃人二十四名ヲ右博覧会ニ出場セシムルコト。
二、乙ハ右出場者ニ要スル総テノ費用ヲ負担スルコト。但シ、本項ノ中生蕃引率者ノ月額手当ハ甲ニ於テ定ムル金額ヲ乙ニ於テ支給ス。
　但シ、其費用ハ台湾蕃社出発ノ日ヨリ帰社ノ日迄ヲ計算スルコト。
三、甲ハ生蕃人ヲシテ日英博覧会会場ニ在テ乙ノ指定スル建物又ハ場所ニ生蕃人ノ生活状態ヲ作ラシメ公衆ニ示スコトヲ約ス。
　但シ、舞踊及各種行列ノ催シアル場合ハ其ノ伍列ニ参加スルコトハ生蕃人ノ任意トス。
四、生蕃人ノ生活資料ハ生蕃人引率者ノ要求ニ随ヒ、生蕃人ニ適当スル飲食物、其ノ他ノ物品ヲ乙ニ於テ供給スルコト。
五、乙ハ生蕃人及其ノ引率者ニ対シ、台湾蕃地方乃至英国倫敦間往復ノ旅費ヲ支給シ、其ノ汽車汽船ハ引率者ハ一等及二等トシ、生蕃人ハ三等ノ待遇ヲ為スコト。
六、乙ハ生蕃引率者ノ日常宿泊料車馬賃等ハ日本政府ニ於テ規定セル官吏旅費規則ニ依リ支給スルコト。
七、乙ハ生蕃人、台湾蕃社出発ノ日ヨリ帰社ノ日マデ毎日，日本貨幣金一円ノ日当ヲ支給スルコト。
八、生蕃人病気ニ罹リ、又ハ負傷シタルトキハ、若ハ死亡シタルトキハ乙ニ於テ其ノ費用ヲ以テ相当ノ手当ヲ為スヘキコト。
九、乙ハ生蕃人カ日英博覧会会期中ト雖モ、台湾ニ帰社ヲ希望スルトキハ何時ニテモ乙ノ費用ヲ以テ台湾蕃社ニ帰社セシムルコト。
十、乙ハ生蕃人ノ引率者カ死傷シタルトキハ原因ノ如何ニ拘ラス日本政府ニ於テ規定セル官吏ノ身分ニ相当スル総テノ支給ヲ為スヘキコト。
十一、以上列記ノ外、引率者ニ於テ生蕃人ノ為ニ必要已ムヲ得サルモノト認メタル酒、煙草等給与上ノ要求ハ之ニ応シ、其ノ費用ハ乙ニ於テ負担スルコト。
十二、乙カ生蕃人及其ノ引率者ニ対シ支給スル日常宿泊料ハ、一週間分前週ニ於テ前渡支払ヲ為スコト。
十三、以上、各項目ノ生蕃人及其ノ引率者ニ対スル契約ニ違反シ、損害ヲ生シタルトキハ、乙ニ於テ其ノ賠償ノ責ニ任スルコト。

此契約書ハ正本二通ヲ作リ、双方署名捺印ノ上、各自二通宛ヲ所持スルモノトス。

明治四十三年二月二十一日

大嶋久満次
日英博覧会余興部シンジケート
右　代表者　　Juliun Hick

The Japan-British Exhibition and the Idea of "Human zoos"

ABSTRACT

The Japan-British Exhibition was held at Shepherd's Bush in London in 1910. The exhibition succeeded in attracting public attention, displaying Japanese art, handicrafts, silk goods and so on. In particular, spectators were deeply impressed when they entered into the Japanese garden, called "Poetic Japan" or "Fair Japan".

In this exhibition, various kinds of entertainment, for example, *Sumou* wrestling, were performed to attract spectators. At the same time, aborigines of Taiwan and the Ainu of Hokkaido were displayed their customs, manners and physical characteristics in "native villages". It was clear that they were observed as objects of "human exhibit". Furthermore, many Japanese craftsmen participating in the exhibition, were also exposed from the Orientalist's point of view.

This paper aims to describe the details of the Japan-British Exhibition from a historical-anthropological standpoint.

Key Words: Japan-British Exhibition, Human zoos, aborigines of Taiwan, human display